

カルチャー・ショック 外国人のみた日本



Cheng Lu-Lin
出身地：台湾・台北
所属：中央研究院社会学研究所副研究員
日本滞在：2006年8月～2007年3月

円陣と音景色

鄭 陸 霖

昨年末、日本人が忘年会を駆け回っているとき、いつものように仕事から遅く帰ると、居酒屋や駅の側で、人々のつくる大小様々な輪を、普段よりも多く見ることができた。全員同じ距離を保ちながら、他の全ての人に挨拶をし、そして解散していった。わたしはこれを見て、自分の「重大な発見」をいっそう確信した。すなわち、「日本人は輪をつくるのが好きである」。

あるとき、なんとなく思った。これはいつも国旗の赤いまん丸を見ていることが、知らず知らずのうちに影響しているのだろうか。それとも、東京人は終日、皇居を中心に円を描いている山手線に乗っているせいだろうか。あるいは、ドラえもんの好物のどら焼きが原因だろうか、と。

その後、日本人から、輪を「円陣」と呼ぶことを知った。日本人が一つのフォーメーションとして捉えていることを聞いて、理論の新しいバージョンを思いついた。大小様々な輪をつくれれば、人数によってフォーメーションを調整する必要はなく、そのために話し合うことは省かれる。全員が同時に「想像の中心」に身体を向けることで、可視的な「場」を形成でき、最も効率よく、集団のリンクージュをつくることのできるのだ。

わたしは「輪をつくることを好む日本人」から、この社会が「合理的な効率性」と「集団の想像」を完璧に結びつける、微妙な糸口を見出したように思った。

耳で聴くと、東京はどんな都市なのだろうか。交差点の信号は鳥のようにさえずり、電車の閉まる時には乗降を促す音楽が流れる。エレベーターは開閉をアナウンスする。券売機もキャッシュディスプレイも音声で指示をする。目の不自由な人は、東京では容易に自らの存在を感じることができるとはいえないだろうか。

このような「親切的な機械」の出す音声とともに、興味深いのは、親切的な日本人が大量に発する疑似機能的な音声であり、これも東京の音景色に加えることができる。機械の音声がまだ不完全なところでは、東京人は毎日、各種の機能を果たす声を発している。

商店やレストランに入れば、店員は元気によく挨拶する。それは予め録音されていたかのように繰り返される。注文をすれば、あらゆる店員の間で木霊のように連呼される。バスや電車でも、飽くことなく最新の情報が放送される。

わたしはこのような心遣いのゆきとどいた音声が好きだ。合理的な機能を果たすだけではなく、独特の雰囲気をつくっている。しかし、一人の外国人として、一日中、「人のような機械」や「機械のような人」の発する音声に囲まれ、「音声は多いが、対話は少ない」というコントラストのなかにいると、そのうち何とも言い難い孤独感に襲われる。

ある日、薬局で会計を待って並んでいると、例の標準化された、鼻にかかった声が繰り返して耳に入ってきた。レジでは店員が不思議なくらい一定の速度で、客が前に立つたびにマニュアル化された問答を繰り返していた。それを聞いて、急に寂しさを感じた。

アメリカの南部に留学していた経験から、ちよつといたずらに「今日、いい天気ですね」と言ってみた。彼女はあつげにとられ、一瞬、ショートしたベルトコンベアのように動かなくなってしまった。

数秒後、彼女自身の、自然な話し方で、ふふっと笑った。店を出てからも暫くは、あの笑い声が耳の中に残っていた。あの日の午後、親切的な東京に暖かい人間味が加わったのだ。

(前海外客員研究員／訳＝佐藤幸人)